UNIVERSITY OF CAMBRIDGE

ASIAN AND MIDDLE EASTERN STUDIES TRIPOS Part II

Japanese Studies

Friday 8 June 2012 9.00 – 12.00

J.12 MODERN JAPANESE TEXTS 3

Candidates should answer ***one*** *question from section A and* ***two*** *questions from section B.*

Write your number ***not*** *your name on the cover sheet of* ***each*** *Answer Book.*

STATIONERY REQUIREMENTS
20 Page Answer Book x 1
Rough Work Pad

SPECIAL REQUIREMENTS
None

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed that you may do so by the Invigilator.

S

SECTION A

Translate ONE of the following passages taken from unseen texts into **English**. [40 marks]

1

189

はじめに

日本の対中国政策は、どのような組織およびどのような人物が関与して、どのような過程を経て形成されるのだろうか。これが、本付章のテーマである。日本の対外政策全般については、一九七〇年代にいくつかのすぐれた業績が発表されている。[1] また、最近の外交組織のあり方に関しても、少数ではあるが、分析がある。[2] しかし、ある国に対する政策決定にしぼって、それに関与する組織や決定のプロセスを分析したものは、あまり多くない。したがって、ここでの分析は、特定の先例があるわけではなく、きわめて暫定的なものにならざるを得ないだろう。

本付章では、まず中国政策に関与している主要な組織および主体について略述し、さらにそのよう

question continues…

な組織がどのように政策決定に関与しているかをできるだけ具体的に記述することにする。このような作業を通して、中国政策の決定が日本の対外政策決定のなかでどのような特色を持っているか、たとえば、対米政策の決定とどのように異なるか、対ソ政策の決定とどのように相違するか、そこにどのような問題点があるか、その問題点には中国政策特有のものがあるか、などの点を検討してみたい。

さて、「外交関係を処理すること」は、日本国憲法第七三条の定める内閣の任務である。したがって、対外関係の決定に関与する組織としては、当然、内閣およびその長たる内閣総理大臣、その下の行政機構としての各省庁が取り上げられなければならない。とりわけ、「外交政策の企画立案及びその実施」（外務省設置法第三条）をその任務の一つとする外務省が重要であることはいうまでもない。また、国会が「国権の最高機関」（憲法第四一条）である以上、国会および政党・国会議員の組織についても検討されなければならない。加えて、政策決定に影響を与えるという面からいえば、さらに広く民間組織・マスコミも考慮しなければならない。以下では、このような組織を順に検討していくことにしよう。

内閣総理大臣

日本の政策決定の特徴はコンセンサス重視であり、「かつがれる」のがリーダーであって、先頭を走るのは日本的でないとは、しばしば主張されることである。たしかに、日本の外交政策が毛沢東在世中の中国のように「長官意思」（鶴の一声）で決まることは、それほどなかった。また、日本の総理大臣は、アメリカの大統領のように国民から直接選挙されるわけではないので、議会との対決も辞さずに政策を断行したり、官僚機構を無視して秘密裡に重大外交政策を進めるなどということはそれほど多くはない。しかし、そのことは、政策決定における総理大臣の重要性を低めるものではない。対中政策についても、重要政策は総理の決断なしには政府として決定されないのであって、総理が積極的でない重要政策が実行されることはほとんどありえないのである。日中国交正常化は田中角栄総理の決断なしに実行されなかったし、日中平和友好条約の締結も福田赳夫総理が積極的になってはじめて実行できたのであった。

毛沢東 Mao Tse-tung
田中角栄 Tanaka Kakuei
福田赳夫 Fukuda Takeo

TANAKA AKIHIKO, *Nitchū kankei, 1945-1990* (1990), pp. 189-91.

(TURN OVER

2

「どうも、さっぱり判りませんねえ」
と遊びに来てお茶を呑んでいた青年が言った。
「何が」
と僕が訊いた。
青年が言うのには、この間うちから関東地方には雨が降り続いていて、もう梅雨に入っているのだと思っていたら、TVやラジオでは、沖縄や九州は順々に梅雨入りしたけれども、本州は未だ梅雨には入っていないと言っていたと言うのである。そうこうするうちに、良い天気が続くようになったと思ったら、いよいよ本州、そしてやがて関東地方が梅雨に入ったと報道していたと言うのである。そして今日もこんな良い天気で、一体、梅雨というのは何なのでしょうね、雨が降るから梅雨と言うのではないのですかね、と訝っている。
「僕もその事を変だと思っていた」
と僕が言った。丁度、二、三日前、ラジオのニュースを聞いていたら、今日からいよいよ北陸地方が梅雨入り致しました。北陸地方はずっと晴れが続いて居ります、と言っていて、どうも何がどうなっているかが判らず、不思議な事だと思っていたからである。
「前線と言う言葉があるね」
と僕が言った。
「はあ、桜前線とか、秋雨(あきさめ)前線とか言うのもありますね」
と青年が言った。
「そうそう、その前線のね、梅雨前線というのが、だんだん動いて来て、停滞した時を梅雨入りと言うらしいよ」
「然しね、だから変だと思うのです。梅雨前線というのは、梅雨らしくなったという地点から地点を幾つか結んだ線でしょう。桜前線というのが、桜が咲き出した幾つかの地点を結んだ線であるように」

question continues…

「そうだとすればですね、梅雨入りしたのにこんなに良い天気だったり、梅雨入りした北陸地方は快晴ですというのは変ですよ」

「何だか忘れてしまったのだけれども、梅雨前線を決めるのは、上空の寒気団と暖気団が押し合いをして停滞した時に何かがどうにかなるんだとかいう話しだった気もする」

「へえ、すると、雨は降らなくても梅雨は梅雨って訳ですか」

「そうらしいよ」

「そうらしいって、何時もの先生らしく無いですね。何時もはなんでももっと積極的に興味を持って調べずには置かない先生なのに」

「前に知ろうと思って調べてみた事はあるんだよ、然しね、梅雨というのは判然しないんだ。判然としないから梅雨が梅雨らしいっていう事が判っただけだったよ」

「へえ」

「空梅雨なんていうものがあったり、雷が鳴ると梅雨が明けると昔から言われているのに拘らず、一昨日は半日雷が鳴ったりしたろう」

「えゝ、ひどい雨も降りました」

「要するにね、昔から言われている梅雨という、梅の実のなる頃の長雨という概念をね、年々の気象の変化の中で納得しようとするから、説明の方に無理が来るんだろうね」

「でも、矢張り六月は降雨量が多いんでしょうね」

「多いらしいよ、梅雨の頃の降雨量が少ない年は、夏になって渇水で困るものね」

判る	wakaru
訊く	kiku
訝る	to wonder, have doubts about
然し	shikashi
何時も	itsumo
拘らず	kakawarazu

DAN IKUMA, 'Zensen', *Paipu no kemuri, Naokatsu*, 1982, pp. 112-14.

(TURN OVER

SECTION B

Candidates should translate into **English** TWO of the following three passages taken from seen texts: [30 marks each]

3

歴史家による対話

歴史問題は、日中両国の間で大きな壁となっている。私はかねてより日本と中国、日本と韓国の間で、歴史研究者による対話が重要だと考えてきた。二〇〇一年一〇月に小泉首相と金大中大統領の間で日韓歴史共同研究委員会の設立について合意が成立したときには、恩師の三谷太一郎東京大学名誉教授にお願いして座長となっていただき、私自身も委員となった。委員会は二〇〇二年五月に発足し、二〇〇五年六月に報告書を出した。私は二〇〇四年四月に国連大使に任命されたため途中で抜けたが、その後も注意を払い続けていた。

日中間の歴史対話が必要だと痛感したのは、二〇〇五年四月、日本の国連改革提案に対して中国が猛烈な反対運動を展開したときである。大きな反日デモが行なわれた直後の四月一七～一八日、訪中した町村外務大臣（当時）も、李肇星外交部長、唐家璇国務委員に対し、日中歴史共同研究を発足させることを提案した。ただ、中国側からは、とくに反応はなかった。

国連外交の現場で

二〇〇五年春の国連改革論議において、中国は公式には性急な安保理拡大に反対だという立場を取りつつ、日本の歴史認識を批判する「歴史カード」を使って猛反対を繰り広げた。

その中には、「日本の首相は戦争について一度も謝罪していない」というような、ずいぶんひどい歪曲や誇張があった。中国の外交官自身が、しばしば、靖国神社は戦犯を祀るための国立の神社であると信じ、扶桑社の歴史教科書は日本の戦争責任を否定していると信じ、しかもそれが国定教科書であると信じて宣伝して回るのだから手に負えない。日中戦争における中国人死傷者の数にしても、東京裁判のころには三〇〇万人、のちに二一〇〇万人、さらに三五〇〇万人と何らの説明もなしに膨らんでいたのが、二〇〇五年の反日運動時には、死傷者数ではなく死者数が三五〇〇万人だと誇

張する者までいた。

こうした中国の運動は、先進民主主義諸国にはさほど影響を持たなかったが、そうでない国々にはかなりの影響があった。私はニューヨークにいて、代表部の同僚とともに中国側の批判が誇張や歪曲であることを説得して回り、またメディアで論文を発表するなどして誤解を正す努力をした。そうした努力は、効果がなかったわけではないが、そのために多くの時間と労力を費やさざるをえず、安保理改革運動の推進は相当に阻害された。つまり、日本の目的を阻むという点で中国は目標を達成したのであり、歴史カードは効果を発揮したのである。

このように、中国が歴史カードを使うことは日本外交にとって大きな障害となる。また、こうした誇張、歪曲された歴史観で若い世代を教育されては後世に大きな問題が残ることになる。日中の間の歴史認識は同じではありえないが、両国のきちんとした歴史家が話し合って、歴史認識のどこが違い、どこが同じか確認しておけば、そうした歴史カードはある程度防げるのではないかと、従来以上に考えるようになった。

KITAOKA SHIN'ICHI, 'Nitchū rekishi kyōdō kenkyū no shuppatsu', *Gaikō Fōramu*, May 2007, pp. 14-15.

(TURN OVER

4

二一世紀に相応しい組織として脱皮できるか

国際連盟脱退から数えて二三年、あの戦争をはさみ国際的孤立から国際社会復帰を名実ともに実現したのが一九五六年の国連加盟であった。以来、日本は、国連外交を重視し、国連の掲げる理念と目的に誠実に従い、世界の平和と繁栄に向けて貢献を心掛け、実行に努めてきた。もとより一国の外交は、国益の実現をめざして行なわれる。国益伸張外交と国際協調外交は方向を誤れば対立概念にもなりうるが、両者を巧みに最大限に実現するのが上手なマルチ外交というものであろう。果たして日本の点数はどうなのであろうか。

国連は、いま創設六〇年を経て大きな転機を迎えている。われわれの世界は、グローバリゼーションが進み富と豊かさが増す中で、負の部分や病弊的現象――国際テロ、その温床たる絶対貧困や社会的不公正、大量破壊兵器拡散の危険性、地球環境破壊、地域紛争多発、深刻な人道問題など、地球規模の難題が山積している。関係国を巻き込んで合意を形成し、枠組みや基準を決め、協力に基づいて解決を図ることが世界の秩序と安定のために不可欠であるのは明らかだ。

イラク戦争を阻止できなかったなど、国連の無力さが嘆かれることがある。ただ、その無力さ、弱体さを批判することは所詮、加盟国を総体として批判することにほかならず、国連がそのまま映し出している世界

question continues…

の現状を嘆くことに等しい。もちろん、無力だ、弱体だといって機構解散に持ち込むわけにもいかない。選択はただ一つ、唯一にして正統性ある普遍的存在としてのこの世界組織が、諸問題の取り組みにおいて効率的・効果的に役割を果たしていけるように衆知を集め、改革を進め、国際社会の期待に応えるべく努力を重ねていくほかないのである。

まさにそのような観点から、創設六〇周年を迎えた二〇〇五年の首脳会合で、国連の大幅改革の必要性が再認識されて「成果文書」と呼ばれる改革の青写真が合意された。事務局改革、総会など主要機関の決議に由来するマンデートの見直し、人権理事会や平和構築委員会など新組織の設立を含むパッケージが、難交渉ではあったがとも

かくできあがった。また、開発、人道、環境といった国連システム全体が扱う分野・問題に、より整合的に取り組むための改革も進められようとしている。これらの青写真を一つひとつ着実に実行に移す努力がいま、進められつつある。各国・グループの利害や思惑が交錯し前途は決して容易ではないが、二一世紀社会に相応しい組織として脱皮できるか否かが、国連組織の事務局と加盟国全体に問われているのである。

ŌSHIMA KENZŌ, 'Gojū nen saki wo niranda atarashii kokuren gaikō no ishizue wo kizuku', *Gaikō Fōramu*, April, 2007, pp. 12-13.

(TURN OVER

5

むかし女がいた。もの心ついた頃から、女の生まれた国は異国と戦争をしていた。大人たちは戦さをしていることを「非常時」という言い方でみんなを納得させようとしているふしがあったが、女にとっては戦争は常時であり、戦争でないときはどんなものか想像できなかった。

それでも、毎年、忘れずに春はめぐってやって来て、森の木々は芽を吹き、花の蕾がふくらむように、女のからだの中にも春の潮がひたひたと満ちてくる年頃になると、女の住んでいる国には来る日も来る日も敵国の爆撃機が来襲した。太陽にきらめいて空とぶ銀色の飛び魚は、その腹から黒い糞に似た爆弾をばらばらと吐き出した。

question continues…

人の一生を四季にたとえれば、女はまだほんの早春にさしかかったばかりであった。女は満ちてくる潮の暖かさの中でほんの少しふくらみ始めたものがいったい何なのかわからないままに、黄ばみ始めた穂の麦畠の畝の間に臥って、穂の間から銀色に輝く爆撃機の編隊を見上げていた。

飛行機の吐き出す黒い糞が女の頭の上に落ちれば、女は死ぬはずであるが、今までのところそういうことはなく、飛行機はいつも彼女の上を素通りして、三十キロばかり離れた軍関係の施設のある街が集中して狙われていた。

女の通っている女学校は戦争がだんだんひどくなってからは、軍服を縫う工場になってしまい、女と同じ年頃の十四五歳ばかりの女学生たちが一日中ミシンを踏んでいた。そのミシンもまた、各家庭から強制的に供出させられたもので、世界中、いろいろなメーカーの種々さまざまな品があったが、あらゆる製品、物資の不足していた当時としては非常に貴重品で、一度手放せば二度と手に入らないものだった。

女学校のあるこの小さな町には、いくつかの酒造りの家があるくらいのものだったから、敵機はまさかこんなところに爆弾を落すこともないだろうというのが学校当局の希望的読みで、女学生たちは敵機が襲来するとただ申しわけに麦畠の畝の間に避難させられた。

question continues…

(TURN OVER

麦の穂が黄色く色づく頃から、空襲は連日のように続き、少女は日に何時間か麦畠の間に寝そべっていられるのをむしろ貴重なものに思った。何しろ、少女は――女はというよりは、少女はというにふさわしい年齢だったが――朝七時から夕方六時まで一日十一時間の労働を非常時の国家によって強いられていたので、ぼんやりからだを休めるわずかな時間を持つだけで、強制労働の囚人がほっと一息つくような束の間の幸福を感じたのだ。たとえ、それが自分の死につながるものであったにしろ、綿のように疲れた幼いからだにとって、それは憩いであるには違いなかったから。

少女はいつもポケットに小さな薄い文庫本をしのばせていて、麦畠で待避している間、その本に読み耽った。

その日、少女がポケットにしのばせていたのは、ロシアの作家、ツルゲーネフの短篇集「あいびき」だった。

「あいびき」は秋の白樺の林に散りしく落葉の黄金色のきらめきと、雨に濡れた白樺の幹の白絹のようなつややかさの中にくりひろげられる恋の囁きである。農夫の娘が薄情なキザな若者としのび逢って、交す、はかない囁き、物語とも言えないほどのとりとめもない小さな情景である。

ŌBA MINAKO, *Mukashi onna ga ita*, 1994, pp. 3-5.

END OF PAPER